

はじめに

○日本各地の沿岸漁民と共に原発をたてさせない取り組みを40年近くやってきたが、原発の大事故によってこれほどの魚介類の放射能汚染が起るとは考えていなかった。3.11以来海の水産物の放射能汚染への対応に追われた一年だったが、淡水魚の放射能汚染にはあまり関心をもたなかった。

○日本の原発は全て海岸にたてられ、淡水魚の放射能汚染を心配する人も少なく、研究報告もほとんどない。チェルノブイリ原発事故のときにヨーロッパの淡水魚でいろいろ研究されているということはほんやりわかっていたが、日本の原発温排水の漁業への影響の調査などに忙しく、深く追求することはしていなかった。

○海産魚におくれて、淡水魚では1年後にセシウムの計測値がピークをむかえ、ヤマメでは体重1キロ当たり18700ベクレルという、海産魚でも見られないような高い値が計測された。しかしこれに近い値はチェルノブイリ事故の年1986年の9月にノルウェーのマス(ブラウトラウト)で観測されている。

○今淡水魚の放射能について調べ始めての想いは、私はヨーロッパで25年前に何が起こったのかを全く知らなかったということである。

○アメリカの画家ベン・シャーンは1960年日本を訪れ第五福竜丸のビキニ海域での被曝の実情を知った後に作品ラッキー・ドラゴンシリーズを発表したが、その第一作の「我々は何が起こったのか知らなかった」というタイトルの画は見る度に引き込まれてしまう。なお、久保山愛吉さんがメッセージを持って病院のベッドに腰掛けている画「ラッキー・ドラゴン」は福島県立美術館が収蔵している。

2012年夏
水口憲哉

はじめに

002

第I部 世界の淡水魚の放射能汚染

1章	問題の元凶 アメリカのチヌークサーモン	006
2章	ヒバクシャ・イン・USA アメリカのボウフィン	010
3章	チェルノブイリ原発事故 ウクライナのテンチ	014
4章	風下の恐怖 ベラルーシのバイク	018
5章	遠くシベリアでも ロシアのグレイリング	022
6章	ベンシャーンの故郷で リトアニアのローチ	024
7章	森と湖の地で フィンランドのバーボット	026
8章	最初に気づいた スウェーデンのラフェ	030
9章	空と海から ノルウェーのブラウトラウト	034
10章	まさかのことが グリーンランドのイワナ	038
11章	ダニューブ川のほとりで オーストリア、ハンガリー、ルーマニアの地衣類	040
12章	このような国でも クロアチアのコイ	042
13章	コルスマスの島 フランス・コルシカ島のウナギ	046
14章	原子力帝国 フランスのニジマス	050
15章	脱原発の足どり ドイツのシロマス	052
16章	カンブリア湖沼域 イングランドのパーチ	054
17章	苦悩と抵抗 アイルランドのアトランティック・サーモン	056
18章	マリ・キュリーとチェコの原発 ポーランド、チェコのブリーム	058
19章	もう一つの核大国 インドのカトラ	060
20章	五大湖の北で カナダのラージマウスバス	062
21章	心配とジレンマ 香港のライギョ	064
22章	ひとのあかし 日本のアユ	068

第II部 東日本の淡水魚の放射能汚染

1章	イワナ、ヤマメ、ウグイ、アユ	076
2章	ワカサギと霞ヶ浦の魚たち	086
3章	マス類の湖とさまざまな魚たち	090
4章	生態系としての問題	094
5章	どう考えればいいのか	102

BOX

BOX 1	世界の核実験	005
BOX 2	淡水魚の異変	021
BOX 3	ニジマスについて	045
BOX 4	原発の温排水をどうするか	049
BOX 5	世界の原発	067
BOX 6	原発事故と漁獲量	073
BOX 7	食べられている淡水魚	075
BOX 8	濃縮係数	085
BOX 9	生態学的半減期	093

おわりに

104